「中学校の教壇から大学時代を振り返る」

新庄市立八向中学校勤務
舟生　卓磨
（平成3年園芸学科卒）

中学校の理科教師となってから、もうすぐ30年が経過する。次の授業のことを考えるのが精一杯という状況から、幾分かは成長できたのではないかと自分では感じている。

私たちの大学在学中はいわゆる「バブル景気」の真っ只中で、就職活動などにそれほど時間を割くことなく学業に専念できた。それより山間部の農家の長男として育った私にとって、山々が遠く、空が広い庄内平野で好きな農業を学ぶことができたのは本当に幸運であった。

就職して6年後、運良く山形大学の大学院で長期研修する機会を得た。とにかく、農学と教育学の違いを知りたかった。結果から言えば両者には共通するものが多い。対象が違うだけで、「課題を解決するための発想やコミュニケーション」「成果を効率的に向上させるための工夫や実践」等、目指す目標や目的は同じである。

中学生にとって「理科」は「科学」への橋渡しとなる大事な時期である。だが、「将来に役立つ教科ランキング」の全国的アンケートでは常に低迷している。農学部出身者から見れば「そんなことはないぞ」と言いたくなるはずだが、それが現在の中学生の現実なのである。

それらを前提に授業を進めていくと、自分の大学時代に経験した多くの話に脱線してしまう。衣食住で最も重要なのは食であり、言い換えれば農業である。物理・化学・生物・地学、どの分野においても生徒の将来に役立つ事を願い授業を構成する。その土台となっているのが大学で学んだ農業である。実験方法はもちろん農園での作業やレポートの書き方、諸問題に対する協議に向かう姿勢等、私が農学部で学んだことは、すべて「理科」として実生活に結びつくことに気づいて欲しいのだ。

今、教育界は様々な問題と向き合っている。いじめ・不登校から教員の勤務形態まで様々である。山形大学農学部で学んだ者は、様々な機会で、これからの人材育成に寄与することができるであろう。AI化が進んでも、人間にしかできない創造性豊かな人格形成を目指して、微力ながらもう少し尽くしてみたい。

「故郷に寄せて」

長野県上伊那農業高校勤務
本山　義治
（平成4年農学科卒
平成6年農学研究科修了）

「兎追いし　かの山　小鮒釣りし　かの川」　童謡・唱歌として親しまれている故郷（ふるさと）です。作詞家高野辰之が故郷を思い、作詞したとされています。

私の実家は、この童謡の舞台となった地に程近く、水稲やブドウ、リンゴ、キノコ類の産地として自然豊かな田園地帯にあります。冬はウインタースポーツ・温泉にと、レジャーと観光を兼ね備えています。この地で育った私は、農学を求めて鶴岡市に住みます。水稲が主体であり、砂丘を生かした高品質メロン、オウトウ、ブドウ、カキなどが特産で、地域ならではの技術に多くのことを学びました。当時、私は植物病理学研究室に所属し、優秀な諸先輩方と心優しい後輩たちに恵まれ、充実した学生生活を過ごしていました。一年間を通じて研究室には行事があり、春は山菜採り、夏は月山登山や湯野浜での海釣りなど、たくさんのイベントをとおして交流を深めました。研究室を超えた付き合いもありました。同じフロアの寒冷地作物学研究室（当時）の学生と、研究のこと、農業のことについて語り合いました。教官との交流もありました。まだ私も若く酒席で教官の自宅まで押しかけたこともありましたが、人間味ある対応をして下さったのを今でも記憶しています。学習では、輪読会など専門的な英語の学習にも力を注いでいただきました。研究の姿勢や考え方など研究者としての一面も磨いてもらいました。研究室での生活をとおして学習はもちろん、社会人としての資質・能力も育まれました。

アルバイトもいくつか経験しました。どの職場でも温かく接してもらい、やりがいを持って仕事に当たれ、自分を知り、深めるよい機会になりました。

このような思い出深い地を第二の故郷と、ずっと思ってきました。卒学して26年の歳月が流れ、現在は農業高校で教鞭をとっています。毎日が人間と農業生物との交流です。

故郷（ふるさと）の歌詞の続きには、「志をはたして　いつの日にか　帰らん」と結ばれています。当時、若人が描いた農業への志（こころざし）を思い起こし、いつか農学の原点となった第二の故郷に戻ってみたい、そんな思いに駆り立てられました。

末筆になりますが、このような貴重な機会を与えてくださった鶴窓会事務局の方々に感謝いたします。

「範となる」

秋田県由利本荘市在住
伊藤　裕樹
（平成5年農学科卒）

20世紀の著名な経営学者である故ピーター・F・ドラッカーは、リーダーとは周囲の「範となる人」、そしてリーダーとして唯一学ぶことのできない資質に「真摯さ」をあげている。またリーダーシップ論についての最新の考え方では、それは後天的に修得可能で、状況や相手に応じその発揮スタイルを使い分けできることの方が重要、との潮流がある。

コロナショックという出来事が黒船のように到来し、人間社会に劇的な変化を強いている今、「自分は真摯に相手と関わっているか」「周囲の範となっているか」と自問し再確認する機会が増えてきている。

自由闊達・率先垂範は、周囲に影響を及ぼす大事な価値基準であると考える。捉え方を変えるとリーダーに必要な資質のひとつにもなり得る。

鶴岡の地を離れて間もなく30年、肉体は年相応なのであろうが、気の持ちようは学生時代と何ら変わっていない。併せて、学部生時代の印象的な場面は不思議と記憶に残っている。

顧みると、研究室では担当教授の「範」に触れていた。故加藤教授からは「自ら考え行動するは大事（ここだけの話ですが、単に私は見放されていただけだと思います）」、数年前に退官された安藤教授には「早寝早起き時間厳守の自律の態様は三文の徳（3時に起きれば夕方はもう夜です、なんて当時の私は言えません）」、角田助手（当時）には「自分のことは脇に置き真っさら真っすぐに人と向き合う姿勢（新婚さんですから、パートナーからの対峙の機会に備わったのでは、なんて今の私でも言えません）」、であった。

独立起業し、エグゼクティブコーチ・経営コンサルタント・ファーマーの3足の草鞋を履き活動している私である。コロナショックで、経営する米の生産・販売の会社ではニューヨークへの輸出米がすべてキャンセルとなった。コンサルティングは殆どが顧問先への訪問からテレワークに切り替わった。コーチングでは、クライアント本人が、その人でなければできない貢献をじっくり考える機会が増えてきた。

生涯、Think globally. Act locally.で秋田の地から世界にアクセスし、農業を中心に据え社会貢献して行く所存であるが、劇変の今であるからこそ、リーダーとして範となっているか、自律の精神で自らに厳しく周囲に寛容であることに磨きをかけたいと考える。

福島県「あんぽ柿」中東輸出へ向けた取組

福島県庁農林水産部
農産物流通課　勤務
菅野　寿一
（平成7年生物生産学科卒）

令和2年2月、NHKの「おはよう日本」で、福島県における「あんぽ柿」の中東輸出へのチャレンジが取り上げられました。全国放送を御覧になり、「なぜ、あんぽ柿なのか、中東なのか。」と疑問を持った方も多いかと思います。ここでこの取組を改めて紹介いたします。

「あんぽ柿」は福島県中通り北部を主産地とする干し柿です。水分の少ない枯露（ころ）柿と異なり、比較的水分が多く、とろっとした食感が特徴です。製法は大正年間に伊達市梁川町五十沢地区で確立されたとされ、「天（あま）干し柿」がなまって「あんぽ柿」になったと伝えられています。東日本大震災前は年間約1,500tが贈答用などとして全国へ出荷されていました。

しかしながら、原発事故に伴う放射性物質の影響により、平成23～24年度の2シーズンに渡り、この「あんぽ柿」は全面的に加工・出荷を自粛せざるを得ない事態となりました。ブランドの喪失という危機を迎えながらも、農業者、JA等関係団体、行政が連携し、全ての柿の樹の洗浄を始め、除染、改植、施肥改善を行いました。また、柿の葉、柿の幼果、原料柿、そして製品としての「あんぽ柿」と各段階での放射性物質検査体制を組み上げました。

そうして平成25年度シーズンより「あんぽ柿」は出荷再開を果たし、近年は年間1,000tを超える出荷量へと回復してきました。この経過から「あんぽ柿」は福島県農林水産物の中でも「復興の象徴」とされています。

一方、中東への輸出を目指す理由ですが、一言で表せば「風評対策」です。風評は国内ばかりではなく、海外にも存在します。震災後、福島県産食品の輸入規制を敷いた国・地域は一時54を数えました。日本政府と連携した情報発信等により、令和2年11月4日現在でその数は18まで減少しておりますが、今なおそれだけの国や地域において、輸入規制が行われているのです。食の安全性確保のため検査をしっかり行い、万が一にも基準値を超える食品が流通することのない体制を整えているにも関わらず、です。

中東、特にアラブ首長国連邦のドバイは、高所得者層が滞在するだけではなく、世界中の人々が行き交う結節点です。また、中東から地中海沿岸にかけてはデーツ（ナツメヤシ）に代表されるドライフルーツを好む食文化もあります。今回、テスト輸送を兼ねたPRとして、ドバイで行われた中東最大規模の食品見本市に出展し、来場者から高い評価を頂くことができました。本格的な輸出に向けては、輸送コストや賞味期限など課題が山積していますが、解決に向けJAグループと共に一歩一歩検討を進めているところです。